九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

第三世界のナショナリズム : わが国における研究の回顧と展望

谷川, 榮彦
九州大学法学部教授

https://doi.org/10.15017/1722

出版情報：法政研究. 43 (3/4), pp.91-116, 1977-03-20. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

第三世界のナショナリズム

——わが国における研究の回顧と展望——

谷川榮彦 他

創立二〇周年を迎えた日本国際政治学会は、その記念事業の一環として、同学会の一九七六年度秋季大会（一〇月二二—二三日、東京霞ガ関ビル・東海大学校友会館）において、第二次世界大戦後の日本における国際政治研究の回顧と展望を試み、国際政治学方法論、第三世界のナショナリズム、平和研究、日本外交史研究の四分野について、それぞれ報告と討議をおこなった。この小稿は、そのときの報告に若干加筆・訂正したものである。拙稿の起草には谷川があたったが、実はこれは山口圭介（北九州大学助教授）、小沼新（宮崎大学助教授）、木村宏恒（熊本大学講師）および谷川の共同研究の成果である。

はじめに

私どもに与えられたテーマは、「第三世界のナショナリズム」に関する戦後わが国の研究について検討せよ、ということであるが、まず、ここで用いられる「第三世界」および「ナショナリズム」の言葉の意味を限定しておきたい。

「第三世界」という言葉はいろいろな意味に使われているが、ここでは、第二次世界大戦後に植民地・半植民地か

ら離脱した国々で、現在のところ基本的には資本主義体制に属している発展途上国、および同じような立場にあるラテン・アメリカ諸国をも含む地域をいい、そこには一〇〇カ国以上が含まれる――そのような地域を指すものと理解する。また、「ナショナリズム（民族主義）」の用語法も多岐にわたっているが、ここでは、それは一般的に近代的・社会的概念であって、民族ないし民族国家（nation-state）の形成、独立、発展、あるいは膨脹を目ざすイデオロギーや運動である、と理解しておきたい。

このような「第三世界」と「ナショナリズム」の意味あいからすれば、私どものテーマの範囲も、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの全地域のナショナリズムに及ばねばならないが、なにぶんにも非力の故に、報告の範囲を限定せざるをえない。つまり、われわれ四人のリーチの及ぶ一応の範囲として、アジア、アフリカに限定しなければならないし、そのなかでもとくに、インドを含めた東南アジア地域、およびアフリカに限らざるをえないのである。この意味では、〝看板に偽りあり〟、〝誇大広告〟のそしりを免れないが、〝無い袖は振れず〟のたとえにもれず、前もってご了承いただきたいのである。

私ども四人の作業分担は、小沼が東南アジアの大陸部、つまりベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、そしてビルマを担当し、木村がその海洋部、つまりインドネシア、マレーシア、シンガポール、そしてフィリピンのほか、あわせてインドについても責任をもち、山口はアフリカを一手にカバーし、最後に谷川が以上三人の作業を含めて総括し、報告する役に就いたわけである。

学会当局から報告依頼をうけてから、私ども四人はそれぞれ研究を持ち寄り、数回にわたって討議を重ね、今日に至ったのであるが、文献収集面その他内容の点でなお不十分な点が多々あるかと思われるので、よろしくご批判の程、お願いしたい。

なお、報告テーマに関するわが国の文献の数は、実際には文献リストの幾倍にも達するかとも考えられるが、ここではわれわれが入手し得たもののなかで、直接関係があり、重要と考えられるもの、二〇〇点に限り、他は割愛した。また、本文中で引き合いに出される文献については、タイトルを簡略にしているが、それぞれマルカッコで番号を附しているので、フル・タイトルは本稿末尾の文献リストの該当番号の箇所をご参照いただきたい。

一　第三世界ナショナリズム研究の一般的傾向

第二次世界大戦がおわってから現在までの約三〇年間の、わが国における研究の足跡をたどってみると、大きく三つの時期に分けることができる。その第一期は、一九四〇年代後半から五五年ごろまでで、いわば黎明期にあたる。

（一）一九四〇年代後半から五五年前後まで（黎明期）

この時期は、アジアの各地で民族解放・反植民地運動がとくに高揚し、各民族があいついで独立を達成しつつあったときであるので、当然それに対するわが国の関心も強かったわけであろうが、戦争によるわが国の人的・物的消耗や社会的混乱などを反映して、研究者の数も少なく、施設も貧弱であり、しかも外国からの文献資料も思うように入手しえないという悪条件のもとで、わが国の研究は全体的にみて貧弱な段階にあったといえよう。日本人の自主的研究よりも、むしろ海外の研究の翻訳・紹介の方が優っていた時代といっても過言ではなかろう。

その時期の翻訳文献のおもなものとして、たとえば、日本太平洋問題調査会でラクノウ会議の記録を編集・翻訳した『アジアの民族主義』（岩波書店、一九五一年）や、アメリカのL・H・ロジンガー（Lawrence H. Rosinger）の編集になる『現代アジアの展望』（岩波書店、一九五三年）、あるいはオーストラリアのW・マクマホン・ボール（W. Macmahon Ball）の『アジアの民族主義と共産主義』（岩波書店、一九五四年）などを挙げることができよう。

他方、この時期のわが国における研究の焦点は、当時のアジアにおける民族運動発展の現状分析におかれ、少なくとも次のような六点の文献を挙げることができる。

(16)丸山『アジアの覚醒』　(129)岡倉「インド人民民主主義革命の展望」　(200)蠟山『マハトマ・ガンジー』　(32)具島「インドシナの民族革命」　(73)同「ビルマ独立論」上中下　(84)小林「インドネシア独立のための闘争」　(194)板垣「マライ・ナショナリズムの展開過程」　(139)西野『鎖を断つアフリカ』

なかでも、丸山静雄の『アジアの覚醒』は、新聞記者としての現地体験にもとづく、いわば〝脚で稼いだナショナリズム論〟の、戦後わが国におけるパイオニア的労作ということができるし、(139)西野照太郎『鎖を断つアフリカ』も、同じく先駆的力作で、当時のアフリカに対する〝ターザン史観〟や〝暗黒大陸史観〟を打破すべく、アフリカ諸民族・人民のナショナリズムへの台頭を主張して一石を投じた点に意義があったと考える。

(二)一九五五年前後から六五年ごろまで(始動期)

ついで第二期は、一九五五年ごろから六五年前後までとし、わが国におけるアジア・アフリカ研究が積極的に開始されたときで、いわば始動期にあたる。とくに、アジア・アフリカ研究の専門機関としてアジア経済研究所や京大東南アジア研究センター、あるいはアジア・アフリカ研究所などが設立され、活動を開始したことは、そのひとつの象徴であろう。また、一九六〇年は〝アフリカの年〟といわれたが、その前後からアフリカ各地の民族解放闘争が一段と高まり、それを反映して、わが国のアフリカ研究も急速に積極化したことも特徴的である。したがって、この時期の研究の焦点も、主として次の点にあったと考えられる。すなわち、第一に、アジア・アフリカ・ナショナリズムの全体的把握、第二に、アジア諸国の民族独立運動史の一層の研究と、ナショナリズムの一環としての非同盟・中立主義の研究、第三に、アフリカ・ナショナリズムの一般的研究、そして第四に、特殊的には、ゴールド・コースト、ガ

ーナーの民族運動研究――などがそれである。しかしながら、この時期まではまだ、外国の文献資料を基礎としたデスク・ワークが中心であって、日本人自身のフィルド・ワークにもとづく研究や、現地語をマスターしたわが国学究の業績は、きわめて少なかった。

このような状況のなかでおこなわれたわが国の研究成果のおもなものとして、一九五六年に世界経済調査会が編集発行した『ナショナリズムの研究』以下八点の文献を挙げることができる。

(1)世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』　(4)岩波講座『植民地の独立』　(6)江口・岡倉・蠟山監修『アジア・アフリカ研究入門』　(20)日本国際政治学会編『東南アジアの研究』　(21)板垣『アジアの民族主義と経済発展』　(153)寺本「アフリカの民族形成」　そのほか、アジア・アフリカの中立主義については、日本国際問題研究所編『中立主義の研究』下を、また各国のナショナリズム・民族解放運動については、リストの該当箇所を参照

右の(1)『ナショナリズムの研究』は、アジア・アフリカのみならず、広く東ヨーロッパやラテン・アメリカのナショナリズムをも対象としてとりあげ、各専門家の具体的、理論的研究を集成した八〇〇ページに及ぶ大作で、わが国におけるこの分野の研究の基礎を築いたものといえよう。

（三）一九六五年前後から現在（発展期）

研究段階の第三期は、一九六五年前後から現在までで、前の二段階にくらべると、発展期と呼ぶにふさわしい。なにしろ、たくさんの優れた研究があらわれており、それらを二〇点前後に絞るのにも一苦労したほどである。こうした発展・盛況をもたらした要因として、第一に、独立後のアジア・アフリカ諸国の国際社会における台頭やベトナム戦争などにともなう世界的な関心の高まり。第二に、日本の高度経済成長の一層の進展と海外への積極的経済進出、それにともなうわが国における関心の強まり。そして第三に、アメリカにおける行動科学や地域研究の発達とその利

用による研究方法の多様化――などを指摘することができよう。こうして、ナショナリズム問題を含めてわが国のアジア・アフリカ研究は、一九六五年ごろから飛躍的に発展するのであるが、実際、一九六五年という年は、ベトナム戦争が国際化し、日韓条約が結ばれる一方では、日本のアジアを中心とする経済進出も積極化しはじめ、日本人が〝エコノミック・アニマル〟とアジア諸国の間から呼ばれだしたのもこの年であって、まさに一九六五年は戦後日本の対外関係史におけるひとつの画期であった。

こうした条件のもとで研究の第三段階が形成されたわけであるが、そこにおける研究のおもな傾向として、次の点を指摘することができよう。すなわち、第一に、各現地語を習得した若い研究者層が生まれ、欧米語文献のみならず現地語資料をも加味した研究があらわれはじめたこと。第二に、こうした現地語を習得した研究者や、民族学者、文化人類学者らを中心としたフィルド・ワークにもとづく、優れた成果がみられるようになったこと。そして第三には、アジア・アフリカ諸国の民族解放運動の歴史的・具体的研究の進展、それとのかかわりでいわゆるネオ・コロニアリズムについての研究、独立後の各国の経済自立化ないし開発問題の研究、それとの関連で南北問題の研究、そして国民統合（national integlation）の研究等々が活発に進められてきたわけである。

以上が第三段階での研究の一般的、主要傾向とみることができるが、各分野における成果のおもなものとして、左のとおり、日本国際政治学会が編集した『第三世界――その政治的諸問題』や、同じく『開発途上国の政治・社会構造』をはじめ二一点を挙げることができる。

(10)日本国際政治学会編『第三世界――その政治的諸問題』(13)森田『改訂・南北問題』(23)岩田『東南アジアのこころ』(25)谷川『東南アジア民族解放運動史』(196)松本『中国外交と東南アジア』(38)小沼「ベトナムにおける統一戦線の発展」(39)真保『ベトナム現代史』(42)丸山『ベトナム戦争』(61)高橋『カンボヂア現代政治の分析』(65)関「タイのナショナリズム」

(87)岸『スカルノ体制の基本構造』　(91)石田・長井編『インドネシアの権力構造とイデオロギー』　(94)増田『インドネシア現代史』　(103)萩原「マラヤのコミュナリズムと国民的統合」　(114)池端「フィリピン民族史の主体的形成」　(132)中村編『インド現代史の展望』　(138)吉田「テーランガーナー闘争の展開とその背景」　(160)小田『現代アフリカの政治とイデオロギー』　(161)西川『アフリカの非植民地化』(169)山口「アフリカにおけるナショナリズムと社会主義」(199)浦野『アフリカ国際関係論』

以上、戦後の約三〇年間におけるわが国のアジア・アフリカ・ナショナリズムの研究について、三段階に分けて概観してきたが、以下これをふまえながら、ナショナリズムの問題別・分野別研究に於ける特徴、成果、課題などについて概略してみよう。

二　民族・民族主義の形成・発展

民族ないし民族主義の形成に関する問題は、本来、具体的・特殊的研究を基礎とした理論的研究のジャンルに属するわけであるが、その理論的研究は、アジアについてもアフリカについても、きわめて少ない。アメリカのK・ドイチュ（Karl W. Deutsch）やR・エマスン（Rupert Emerson）らの理論的研究に匹敵するような研究は、いまだあらわれていないし、マルクス学派の研究についてもそのことはいえる。

この分野のわが国の研究でおもなものとしては、左のとおり、アジアのナショナリズムを「コロニアル・ナショナリズム」と規定し、その性格を理論的に追究した(17)の板垣論文をはじめとして一六点を挙げることができる。

(3)西野「植民地ナショナリズムの理論」　(17)板垣「アジア・ナショナリズムの現段階的展望」　(41)松本『ベトナム民族小史』　(63)河部「タイ・ナショナリズム」　(65)関「タイのナショナリズム」　(71)石井「タイにおける仏教とナショナリズム」　(80)大野『ビルマの社会と経済』　(93)永積・間苧谷『東南アジアの価値体系2——インドネシア』　(114)池端「フィリ

ピン民族史の主体的形成」　(123)高崎「ヒンドゥイズムとナショナリズム」　(124)中村『ネルー――人と思想』　(139)西野『鎖を断つアフリカ』　(144)宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』　(153)寺本「アフリカにおける民族形成」　(160)小田『現代アフリカの政治とイデオロギー』　(188)吉野「ウガンダにおける政治変動とナショナリズム」

このような業績から、われわれは民族・民族主義の形成の条件やプロセス、あるいは民族主義の代表的思想などについて学ぶことができるのであるが、一方では残された課題もまた多い。――第一には、従来、ヨーロッパの経験を基礎とした民族・民族主義理論の枠内で、アジア・アフリカの民族・民族主義の問題も処理されがちであったが、アジア・アフリカ自身の経験にもとづいた具体的、特殊的研究の積み重ねによってこれを修正し、新たな理論を構築してゆく必要がある。この点、マルクス学派の場合も、世界的にいえることであるが、民族理論についてスターリン段階を踏みこえたものはまだ見あたらないので、やはり妥当すると考える。それから、これは今述べた一般的なことの中に組み入れらるべきことであろうが、スカルノ、ネルー、エンクルマ等々各ナショナリズム思想家に関する一層の緻密な研究をはじめ、アフリカのナショナリズムとトライバリズム（traibalism）またはパン・アフリカニズム（Pan-Africanism）とのそれぞれの関係についての、一層の理論的究明などもぜひ必要である。

三　民族解放運動・独立

では、民族解放運動および独立問題の研究についてはどうであろうか？　この分野の研究の一般的特徴として、アジア諸国の民族解放運動の具体的、歴史的研究は、民族解放闘争研究の一環としてのベトナム戦争研究をも含めて、比較的豊富であるのに対し、アフリカ諸国の民族解放運動ないしその歴史の研究がきわめて乏しい、ということを指摘することができよう。これは、一般的に、アジアとアフリカにおける民族解放運動発展の歴史的不均等性と、わが

国とアフリカとの地理的、歴史的関係の特殊性を反映した現象であろう。また、この分野の研究の第二の特徴として、マルクス主義またはそれに近い立場の人達による研究が、比較的多いということもいえる。

かくしてこの分野のおもな成果として、左の二三点を掲げることができよう。――

(4)岩波講座『植民地の独立』　(5)A・A講座『A・A・LAと新植民地主義』　(16)丸山『アジアの覚醒』　(17)アジア協会編『アジアのナショナリズム』　(25)谷川『東南アジア民族解放運動史』　(32)具島「インドシナの民族革命」　(34)加藤「一九四五年ベトナム八月革命とフランス」　(38)小沼「ベトナムにおける統一戦線の発展」　(39)真保『ベトナム現代史』　(42)丸山『ベトナム戦争』　(44)陸井『インドシナ戦争』　(73)具島「ビルマ独立論」　(74)中村「ビルマにおけるナショナリズム」　(78)長沼「ビルマにおける民族民主革命の展開」　(82)大野「ビルマ共産党の足跡」　(91)石田「スカルノ体制のイデオロギー構造」　(95)木村「インドネシア革命論の一視角」　(100)板垣「マラヤ複合社会におけるナショナリズムの発展」　(110)長井「太平洋戦争期のマレー民族主義運動」　(127)蠟山『インド・パキスタン現代史』　(133)桑島「インド・パキスタン分離独立の前提」　(136)山口「独立後政治史の試み」　(193)川端「植民と抵抗――ギニア・ビサウ民族解放運動前史」

これら各種の業績をとおして、民族解放運動の社会経済的条件や指導勢力の社会的性格、その役割、反植民地闘争のプロセス、さらには、せっかく獲得した独立を再び脅かそうとするネオ・コロニアリズムの問題等々について、アジア・アフリカ一般的にしろ、各国的にしろ、われわれはいろいろ教わるところが多い。

しかしながら、こうした従来の研究でこの分野の諸問題が解決されつくしたというわけではもちろんない。まずは、各国の民族解放運動の具体的、歴史的研究がさらに深められる必要があるし、理論的研究についてもいろいろ指摘することができる。たとえば、一般のマルクス主義的文献によると、コミュニズム運動以外の、いわゆる「ナショナリズム」の指導勢力を民族ブルジョアジーに求め、民族解放運動または民族革命におけるブルジョア勢力の二面

性、つまり歴史的進歩性と反動性を常に強調している。たしかに、特定の国の民族解放運動の歴史をみた場合、そのことがいえるのであるが、といって、アジア・アフリカのナショナリズム運動をただその観点からのみみることは危険であろう。というのは、最近の民族解放運動、とくにアフリカの解放運動や民族政権のイニシアティブは、ただ民族ブルジョアジーによって握られているというより、都市小ブルジョアジー、インテリゲンチャ、各専門職などの「中間層」(middle class)を含めた勢力によって握られている場合が多く、その運動や権力の論理も、歴史の経験が示す民族ブルジョアジーの論理と同じであるとは限らないからである。この点で、わが国のマルクス主義文献が常にこうした問題を無視しているというわけではないが、その一層の研究が望まれる。

また、このこととの関連において、各国のナショナリズム運動、民族解放運動ないし民族政権の、性格や歴史的位置を確定するためには、それらの科学的類型化が必要であるが、これもまた今後の課題であろう。もとより、従来いろいろな立場から、その類型化が試みられ、私自身も(25)の拙著で試みたのであるが、各国の民族解放運動の歴史的発展を具体的に構成していこうとする場合には、これまでの類型理論では不十分であることを痛感する。さらに、今後の課題として、ナショナリズム運動と民衆、とくに農民大衆との関係についての具体的、理論的研究もぼつぼつあらわれてきているが、一般的にいって、従来のナショナリズムまたは民族解放運動の歴史は、インテリゲンチャやその政治勢力中心の歴史であって、民衆、とくに労農大衆のかかわらせかたが少なかったのではないか、と自己批判をも含めて感じている。

四　経済自立化

ナショナリズムとの関連において各国の経済問題をとらえる場合には、民族あるいは国家の自立化を志向するナシ

ョナリズムの原理からして、すべての「経済開発」＝ナショナリズムの経済的側面＝「エコノミック・ナショナリズム」の問題として捉えるのではなく、その経済開発が真の民族ないし国家の自立化や独立維持を志向しているか否か、の客観的観点から選択的に捉えらるべきであろう。ところが、他方では、アジア・アフリカ諸国の「経済開発」について書かれた文献はかなり目に触れるのであるが、こうした観点から、つまりエコノミック・ナショナリズムの視点から取り上げられたものは、意外に少ないように思う。

この分野の優れた文献として、左のとおり一六点を選んだ。――

(9)尾崎『低開発政治経済論』　(11)板垣『南北問題の研究』　(13)森田『改訂・南北問題』　(21)板垣『アジアの民族主義と経済発展』　(24)川田『アジアの挑戦』　(33)小林「北ベトナムにおける土地改革」　(36)逸見『帝国主義と民族民主革命』　(43)木村「南ベトナムの土地改革」　(55)高橋「ラオスにおける経済開発の現状」　(87)岸『スカルノ体制の基本構造』　(106)松尾「マレーシア経済開発の基本」　(113)川田「フィリピン経済の発達とその特質」　(132)伊藤「独立後の独占資本の発達と経済的従属」　(161)西川『アフリカの非植民地化』　(165)矢内原『アフリカナイゼーションの意味と現実』

このなかでもとくに、(13)森田『南北問題』や、(21)板垣『アジアの民族主義と経済発展』、(24)川田『アジアの挑戦』(87)岸幸一『スカルノ体制の基本構造』、そして(161)西川『アフリカの非植民地化』などは、言葉の真の意味での民族主義的経済自立化問題を念頭におきながら書かれた力作として評価したい。

そこで、この分野における今後の研究課題であるが、実のところ、残念ながら私自身、体系的に把みきっていない。ただ部分的意見が許されるならば――各国の経済自立化問題は、自立化の基礎としての農地改革の問題を抜きにしては語られないし、また自立化問題は単に経済の問題というより、すぐれて政治的指導、組織、運動、ひいてはイデオロギーの問題とも密接に結びついた広範複雑な問題であるので、総合的見地からの研究が必要であろう。

五　国民統合

「国民統合」（national integlation）という言葉をわれわれは、「特定の国民的政治共同体がその民族ないし国家の共通の紐帯や特殊利益を強めたり、おし進めたりすることによって、共同体内部の亀裂や紛争を克服する能力」というふうに理解しているが、この意味からする国民統合の問題は、ナショナリズムの核心をなし、そこにはいろいろな局面が含まれる。実際、アジア諸国における国民統合の問題としては、各国家内の少数民族問題、コミュナリズム（communalism）問題、異宗教問題、華僑問題、共産勢力抑圧問題、そして国境問題などが含まれ、他方アフリカ諸国では、部族間対立問題、人種主義問題、そして国境問題などが国民統合問題の中心になっている。

こうした問題にたいし、わが国の研究者もそれぞれ大なり小なり取っ組んで、左記のような主要業績もあらわれているが、こうした研究を手にしてまず痛感することは、実際問題として、各国の国民統合問題がきわめて複雑で、解決に困難であろうということである。

(22)岩田『東南アジアのこころ』(49)小沼「ベトナムにおける新植民地主義」(50)高橋「〝王家〟と〝山河〟」(51)藤田「ベトナム革命の新段階と南部の都市」　(195)青野「王制社会主義」　(60)深作『現代カンボジア考』　(64)中島「タイ華僑の現状」(66)本岡「タイ国政治の長期的傾向を規定する条件」(77)飯島「カレン族問題とビルマの苦悩」(81)生野「ウ・ヌーと仏教社会主義の成立」(88)岸「インドネシアの国民形成における慣習首長の地位と役割」(103)萩原「マラヤのコミュナリズムと国民的統合」　(104)築島「マレー人における自治の心理」(105)橋本「マレーシアおよびシンガポールの政党制について」(137)中村「インドの多民族統一と国民統合」(198)小田「現代アフリカの政治と軍部」(169)山口「アフリカにおけるナショナリズムと社会主義」

右の一七点の研究のなかでも、タイやラオスの村落で文化人類学的考察をおこない、小数民族集団の反中央権力的

志向性を具体的に明らかにした(22)岩田『東南アジアのこころ』や、深刻なカレン族問題に直面したビルマの実情を伝える(77)飯島「カレン族問題とビルマの苦悩」をはじめ、(103)萩原「マラヤのコミュナリズムと国民的統合」や、(137)中村「インドの多民族統一と国民統合」などは、とくに印象深い仕事である。

今後の課題としては、ナショナリズムの核心をなす国民統合問題は、きわめて幅の広い、複雑な問題を含んでいるので、その研究には包括的アプローチ、学際的研究が必要であろう。これまでのところ、経済自立化問題やイデオロギー問題との関連で、国民統合問題が論ぜられる場合が多かったが、今後はそれ自身の総合的、学際的研究が望まれる。

六　対外政策

ナショナリズムの対外政策ないし国際的対応の問題は、先に述べた民族解放運動や経済自立化問題とも重なる面をもち、また対外政策一般ともオーバーラップしているので、問題の範囲を限定しにくいが、少なくとも、冷戦と民族解放運動の関係の問題や、非同盟・中立主義の問題、各民族国家間の国境紛争の問題などをとりあげる必要があろう。こうした問題にかかわる研究として、左記のような文献を挙げることができるが、なかでも、(19)の日本国際問題研究所で編集された『中立主義の研究』上・下巻は、わが国で最も包括的な中立主義研究で、その下巻でアジア・アフリカの中立主義が広く扱われており、特筆に値する。

(19)日本国際問題研究所編『中立主義の研究』下　(8)岡倉『アジア・アフリカ問題入門』　(31)谷川「コミンフォルムと東南アジア」　(196)松本『中国外交と東南アジア』　(54)野上「中立ラオスの分裂史」　(57)山川「カンボジアの中立と経済開発」　(58)山川「カンボジアの中立政策と国内事情」　(68)矢野「サリットとタイ国の〝親米〟外交」　(83)佐久間「シンガポールの

中国政策」（146）日本国際政治学会編『アフリカの研究』（199）浦野『アフリカ国際関係論』

こうしたナショナリズムの対外政策に関する研究課題もいろいろ考えられるであろうが、なによりもまず大切なことは、世界の近・現代史、とくに植民地主義や戦争の歴史が示しているように、アジア・アフリカ諸国のような小国ないし発展途上国のナショナリズムが、本来の使命とする真の自主独立を求めようとすれば、それは必然的に世界平和を必要とするということ、国際緊張のもとでは民族・国家の独立も危くなるということ、つまり独立と平和の問題はメダルの裏表の関係にあることを、その国のナショナリストのみならず、われわれ研究者もよく認識してかかる必要がある。非同盟・中立主義の原理もまさにそこにあるが、その非同盟・中立主義を含めたナショナリズムは、理論的にも実践的にも、平和研究・平和学の概念や方法を積極的に取り入れてゆく必要がある、つまり「ナショナリズムの平和学」が要請されていると考える。この点、日本平和学会において積極的に研究が進められようとしており、今後の成果が期待される。

おわりに

以上、戦後三〇年間における、アジア・アフリカ・ナショナリズムに関するわが国の研究について概観してきたが、最後に、わが国のアジア・アフリカのナショナリズム研究に関するわれわれ四人の全体的感想をのべて、この報告を終りたい。――

第一に、わが国ではナショナリズムに関する具体的、特殊的研究とその記述が中心となっており、それはそれとして重要であるが、他方、アメリカのL・W・パイ（Lucian W. Pye）教授やJ・H・カウツキー（John H. Kautsky）教授らのような、あるいは彼らと立場は異なるが、ソ連の専門誌『世界経済と国際関係』にしばしばみられる関係論

文のような、理論的研究ないし、具体的・特殊的事象の理論化・一般化に対する努力が乏しい、ということである。このような状態では、理論の発展はもとより、ひいては具体的、特殊的研究の深化も期しがたい。このことは、理論と地域研究とのフィードバックの有機的関係をさらに積極化させる必要があることを意味している。

第二に、これは第一の問題と表裏の関係にあることであるが、民族学や文化人類学の分野では、ナショナリズムの問題を意識すると否とにかかわらず、民族やナショナリズム研究の素材となるようなフィルド・ワークや理論的研究が進められているようであるが、国際政治学者や政治学者の側から、こうした成果を十分に生かす努力が不足しているということである。多方面からの学際的研究への努力が望まれる。

第三に、これはとくにアフリカ担当の山口からの提言であるが、アフリカのナショナリズム研究や政治研究の場合、それに従事している人材が非常に少なく、そのため研究も質、量ともに不十分であり、しかも、その少ない研究者同志でのコミュニケーションが十分でなく、たがいに切磋琢磨することも少なく、外国語文献はたくさん引用するが、日本人の文献はほとんど引用しないといった実情にあるということである。つまり、研究者の数的増加とともに、相互交流が切望されるわけである。しかしながら、こうした状況は、アジア研究にも大なり小なり当てはまるように思われる。

このたび幸いにも、学会当局からわが国におけるアジア・アフリカ・ナショナリズム研究の回顧と展望をやるようにとの依頼をうけ、その道の先輩、同僚、後学の優れた研究成果に接し、勉強する機会を与えられたことを多としている。この経験を今後のわれわれの研究に大いに生かしてゆきたい。

第三世界のナショナリズム関係主要文献

——A・Aを中心として——

一　一般

(1) 世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』慶応通信、一九五六
(2) 中東調査会編『アジア・アフリカ民族運動の実態』至文堂、一九六〇
(3) 西野照太郎「植民地ナショナリズムの理論—カリスマ的指導者論の批判を中心に—」世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』慶応通信、一九五六
(4) 岩波講座、現代四『植民地の独立』岩波書店、一九六三
(5) アジア・アフリカ講座第一巻『A・A・LAと新植民地主義』勁草書房、一九六四
(6) 江口・岡倉・蠟山監修『アジア・アフリカ研究入門』青木書店、一九六五
(7) 岡倉・寺本・犬丸編『民族解放運動の歴史』上・下、労働旬報社、一九六七
(8) 岡倉古志郎『アジア・アフリカ問題入門』第二版、岩波書店、一九六七
(9) 尾崎彦朔『低開発政治経済論』ミネルヴァ書房、一九六八
(10) 日本国際政治学会編『第三世界—その政治的諸問題』、『国際政治』三九号、一九六九
(11) 板垣与一編『南北問題の研究』(1)、アジア経済研究所、一九六九
(12) 蠟山芳郎『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ概論』三省堂、一九七一
(13) 森田桐郎『改訂・南北問題』日本評論社、一九七二
(14) 土生長穂編『新植民地主義と民族革命』、岡倉・江口監修『七〇年代のアジア』③政治編、時事通信社、一九七三
(15) 斉藤吉史『東南アジア』朝日新聞社、一九七五　※訂正(31)の後へ

二　アジア

(1)　アジア・東南アジア一般

(16)　丸山静雄『アジアの覚醒』日本出版協同ＫＫ、一九五二
(17)　アジア協会編『アジア・ナショナリズム』日刊工業新聞社、一九五七
(18)　谷川栄彦「植民地ナショナリズム—東南アジア」『国際政治』四号、一九五八
(19)　谷川栄彦「東南アジアの中立主義」日本国際問題研究所編『中立主義の研究』下、一九六一
(20)　日本国際政治学会編『東南アジアの研究』有斐閣、一九六一
(21)　板垣与一『アジアの民族主義と経済発展』東洋経済新報社、一九六二
(22)　岩田慶治『東南アジアのこころ』アジア経済研究所、一九六九
(23)　衛藤瀋吉編『アジア現代史』毎日新聞社、一九六九
(24)　川田侃『アジアの挑戦』東大出版会、一九六九
(25)　谷川栄彦『東南アジア民族解放運動史—太平洋戦争まで』勁草書房、一九六九
(26)　斉藤吉文『東南アジアの構造』朝日新聞社、一九七一
(27)　滝川勉編『東南アジアの農業・農民問題』亜紀書房、一九七一
(28)　谷川栄彦「東南アジアにおける民族運動（一九三〇年代）」岩波講座『世界歴史』二八巻、岩波書店、一九七一
(29)　谷川栄彦『東南アジアの民族革命』三省堂、一九七一
(30)　今川瑛一『東南アジア現代史』亜紀書房、一九七二
(31)　谷川栄彦「コミンフォルムと東南アジア—カルカッタ会議をめぐって—」『法政研究』四一巻四号、一九七三

(2)　ベトナム

(32)　具島兼三郎「インドシナの民族革命」潮流講座『経済学全集』Ⅰ、潮流社、一九四九
(33)　小林栄二「北ベトナムにおける土地改革」『アジア経済』一巻三号、一九六〇
(34)　加藤晴康「一九四五年ベトナム八月革命とフランス」『歴史学研究』三〇五号、一九六五

(35) 木村哲三郎「北ベトナムの社会主義建設」『社会科学』八号、一九六五
(36) 逸見重雄『帝国主義と民族民主革命―ベトナム問題を中心として―』法大出版会、一九六五
(37) 高橋保「南ベトナム経済の現状」『アジア経済』七巻二号、一九六六
(38) 小沼新「ベトナムにおける統一戦線の発展」『国際政治』三九号、一九六八
(39) 真保潤一郎『ベトナム現代史―帝国主義下のインドシナ研究序説―』春秋社、一九六八
(40) 本多勝一『戦場の村』朝日新聞社、一九六八
(41) 松本信広『ベトナム民族小史』岩波書店、一九六九
(42) 丸山静雄『ベトナム戦争』筑摩書房、一九六九
(43) 木村哲三郎「南ベトナムの土地改革」滝川勉編『東南アジアの農業・農民問題』亜紀書房、一九七一
(44) 陸井三郎『インドシナ戦争』勁草書房、一九七一
(45) 小沼新「インドシナ戦争終結の条件」『国際政治』四六号、一九七一
(46) 坂本徳松『インドシナ人民戦争』三省堂、一九七一
(47) 真保潤一郎・高橋保『東南アジアの価値体系3・ベトナム』現代アジア出版会、一九七一
(48) 小沼新「ベトナム八月革命史」『アジア経済』一三巻六号、一九七二
(49) 小沼新「ベトナムにおける新植民地主義」『国際政治』四九号、一九七三
(50) 高橋保「〝王家〟と〝山河〟―底辺の第三勢力―」『朝日アジア・レビュー』一八号、一九七四
(51) 藤田和子「ベトナム革命の新段階と南部の都市」『アジア・アフリカ研究』一六巻六号、一九七六

(3) ラオス

(52) 梶谷善之「ラオスをめぐる問題」『国際政治』一六号、一九六一
(53) 奥源造「混迷するラオスの中立化問題」『国際問題』五三号、一九六四
(54) 野上裕「中立ラオスの分裂史」『社会科学』八号、一九六五
(55) 高橋保「ラオスにおける経済開発の現状」『アジア経済』七巻一〇号、一九六六
(56) 真保潤一郎「ラオスの中立主義とその基盤」真保『ベトナム現代史』春秋社、一九六八

(4) **カンボジア**

(57) 山川寿「カンボジアの中立と経済開発」『アジア経済』四巻二号、一九六三

(58) 山川寿「カンボジアの中立政策と国内事情」『国際政治』五三号、一九六四

(59) 佐野明「カンボジアの中立主義と最近の内外情勢」『アジア・アフリカ研究』八巻一号、一九六八

(60) 深作光真『現代カンボジア考・反文明の世界』三一書房、一九七一

(61) 高橋保『カンボジア現代政治の分析』日本国際問題研究所、一九七二

(62) 和田俊「ロン・ノル政権崩壊と新生カンボジア」『朝日アジア・レビュー』二二号、一九七五

(5) **タイ**

(63) 河部利夫「タイ・ナショナリズム—文化的ナショナリズム」世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』慶応通信、一九五六

(64) 中島慰「タイ華僑の現状」『アジア研究』八巻一号、一九六一

(65) 関寛治「タイのナショナリズム」多村浩編『タイの経済開発』アジア経済研究所、一九六三

(66) 本岡武「タイ国政治の長期的傾向を規定する条件」『国際政治』三六号、一九六八

(67) 矢野暢『タイ・ビルマ現代政治史研究』東南アジア研究センター、一九六八

(68) 矢野暢「サリットとタイ国の〝親米〟外交」『国際政治』三六号、一九六八

(69) 河部利夫「タイ現代政治社会の権力構造の動態」山本達郎編『東南アジアにおける権力構造の史的考察』竹内書店、一九六九

(70) 河部利夫・田中忠治『東南アジアの価値体系1・タイ』現代アジア出版会、一九七〇

(71) 石井米雄「タイにおける仏教とナショナリズム」高橋保編『東南アジアのナショナリズムと宗教』アジア経済研究所、一九七三

(72) 田中忠治「タイ—社会変革の最大の担い手」『アジア』一九七四年二月号

(6) **ビルマ**

(73) 具島兼三郎「ビルマ独立論」上・中・下『法政研究』一九巻二〜四号、一九五二

(74) 中村弘光「ビルマにおけるナショナリズム」世界経済調査会編『ナショナリズムの研究』慶応通信、一九五六
(75) 浜渕修三「ビルマ軍事政権成立の背景」『アジア経済』三巻四号、一九六二
(76) 吉岡一郎「ビルマと中国」『国際問題』九〇号、一九六七
(77) 飯島茂「カレン族問題とビルマの苦悩」『国際政治』三六号、一九六八
(78) 長沼友兄「ビルマにおける民族民主革命の展開」上・下『アジア・アフリカ研究』九巻六～七号、一九六九
(79) 今川瑛一『ネウィン軍政下のビルマ』アジア評論社、一九七一
(80) 大野徹『ビルマの社会と経済』アジア経済研究所、一九七二
(81) 生野善応「ウ・ヌーと仏教社会主義の成立」高橋保編『東南アジアのナショナリズムと宗教』アジア経済研究所、一九七三
(82) 大野徹「ビルマ共産党の足跡」『アジア研究』二一巻三号、一九七四
(83) 佐久間平喜「ビルマの非同盟・中立政策」『外務省調査月報』一五巻一号、一九七四

(7) **インドネシア**

(84) 小林良正『インドネシア独立のための闘争』潮流社、一九四九
(85) 谷川栄彦「太平洋戦争下のインドネシア民族運動―ジャワを中心として―」『法政研究』三五巻一号、一九五三
(86) 谷川栄彦「インドネシアの『指導された民主主義』」『国際政治』一六号、一九六一
(87) 岸幸一『スカルノ体制の基本構造』アジア経済研究所、一九六七
(88) 岸幸一「インドネシアの国民国家形成における慣習首長の地位と役割」『アジア経済』八巻六号、一九六七
(89) 増田与「インドネシア最初の民族蜂起」『社会科学討究』一三巻三号、一九六八
(90) 土屋健治「スカルノ思想の成立とその背景」『国際関係論研究』三号、一九六八
(91) 石田雄「スカルノ体制のイデオロギー構造―新興国の Nationalism と Socialism の問題に関するインドネシアの事例研究」石田・長井編『インドネシアの権力構造とイデオロギー』アジア経済研究所、一九六九
(92) 長井信一「インドネシア政治の構造と動態」石田・長井編『インドネシアの権力構造とイデオロギー』アジア経済研究所、一九六九
(93) 永積昭・間苧谷栄『東南アジアの価値体系2・インドネシア』現代アジア出版会、一九七〇

(94) 増田与『インドネシア現代史』中央公論社、一九七一
(95) 木村宏恒「インドネシア革命論の一視角—四五年革命の検討」『政治研究』二一号、一九七三
(96) 後藤乾一「インドネシア共和国成立後のイワ・クスマ・スマントリの思想と行動」『社会科学討究』二一巻一号、一九七五
(97) 鈴木佑司「インドネシア政治と社会変動」『世界』三六六号、一九七六

(8) **マレーシア・シンガポール**

(98) 谷川栄彦「第二次大戦後のマラヤ民族独立運動」九大法学部三〇周年記念論文集『法と政治の研究』一九五七
(99) 内田直作「マラヤ連邦の独立とその政治経済的背景」『アジア研究』四巻三号、一九五八
(100) 板垣与一「マラヤ複合社会におけるナショナリズムの発展」『経済学研究』六号、一九六二
(101) 岸幸一「新民族国家の形成と民意の評価、マレーシア連邦と北ボルネオ」『東洋研究』五号、一九六三
(102) 杉山市平「マレイシア連邦、東南アジアにおける新植民地主義的地域統合」『アジア・アフリカ研究』三巻六〜七号、一九六三
(103) 萩原宜之「マラヤのコミュナリズムと国民的統合」『国際政治』三六号、一九六八
(104) 築島謙三「マレー人における自治の心理」『東洋文化研究所紀要』四九号、一九六九
(105) 橋本彰「マレーシアおよびシンガポールの政党制について」『明治大学社会科学研究所紀要』七集、一九六九
(106) 松尾弘「マレーシア経済開発問題の基本」『政経論叢』三七巻三〜四号、一九六九
(107) 萩原宜之「マレーシアの選挙と政党」『年報政治学』岩波書店、一九七一
(108) 岡部達味「シンガポールの中国政策」『アジア経済』一五巻二号、一九七四
(109) 難波武史「シンガポールにおける外国投資の現状」『アジア経済』一五巻一二号、一九七四
(110) 長井信一「太平洋戦争期のマレー民族主義運動—左翼民族運動指導者の座標から—」I・II『アジア経済』一六巻一〇、一二号、一九七五
(111) 吉原久仁夫「シンガポール工業化における外資系企業と民族系企業」『東南アジア研究』一三巻二号、一九七五

(9) **フィリピン**

(112) 滝川勉「フィリピンにおけるナショナリズムと華僑」『農業総合研究』八巻四号、一九五四

(113) 川田侃「フィリピン経済の発達とその特質」川田『現代国際経済論』岩波書店、一九六七
(114) 池端雪浦「フィリピン民族史の主体的形成」『アジア研究』一四巻三号、一九六七
(115) 岩崎玄「スペイン領有時代のフィリピンにおける近代化思想の展開」高橋保編『東南アジアのナショナリズムと宗教』アジア経済研究所、一九七三
(116) 谷川栄彦「アメリカ統治下時代のフィリピン・ナショナリズム」高橋編『東南アジアのナショナリズムと宗教』同右
(117) 谷川栄彦「アジアに機能するフィリピン」『朝日アジア・レビュー』二五号、一九七六

(10) インド

(118) 飯塚浩二・荒松雄「インド民族主義の歴史的展開」岩波講座『現代思想』Ⅲ、一九五七
(119) 中村平治「インドの独立とその政治過程―ネルー＝パテール体制の考察」『東洋文化研究所紀要』二五冊、一九六一
(120) 中村平治「国際政治におけるインドの地位」『国際政治』一六号、一九六一
(121) 村上公敏「インドの中立主義」日本国際問題研究所編『中立主義の研究』下、一九六一
(122) 田中直吉・佐藤栄一「カシミール問題」『国際政治』一六号、一九六一
(123) 高橋直道「ヒンドゥイズムとナショナリズム―思想史的試論―」『思想』四六六号、一九六三
(124) 中村平治『ネルー・人と思想』清水書院、一九六六
(125) 中村平治「インドにおける反帝国主義思想の形成―ダーダーバーイ・ナオロージーの活動によせて―」仁井田記念講座Ⅰ『現代アジアの革命と法』勁草書房、一九六六
(126) 加藤長雄「新植民地主義と国家資本主義―インドにおける経験―」『アジア・アフリカ研究』六巻一一号、一九六六
(127) 蠟山芳郎『インド・パキスタン現代史』岩波書店、一九六七
(128) 西口章雄「インドの国民経済形成」尾崎彦朔編『低開発政治経済論』ミネルヴァ書房、一九六八
(129) 岡倉古志郎「インド人民民主主義革命の展望」『岡倉古志郎・国際政治論集』三、勁草書房、一九六九
(130) 坂本徳松『現代インドの政治と社会』法政大学出版局、一九六九
(131) 落合淳隆『現代インド問題要論』敬文堂、一九七〇
(132) 伊藤正二「独立後の独占資本の発展と経済的従属」中村平治編『インド現代史の展望』青木書店、一九七二

(133) 桑島昭「インド・パキスタン分離独立の前提」中村平治編『インド現代史の展望』青木書店、一九七二
(134) 堀中浩「インド経済における自立と従属」堀中『国際貿易と後進国問題』青木書店、一九七三
(135) 佐々木徹「インド経済の発展とソ連の援助」『アジア経済』一五巻三号、一九七四
(136) 山口博一「独立後政治史の試み」山口編『現代インド政治史試論』アジア経済研究所、一九七五
(137) 中村平治「インドの多民族統一と国民統合―民族概念の再検討―」『思想』六〇九号、一九七五
(138) 吉田光義「テーランガーナー闘争の展開とその背景―分離独立期インド民族運動の一考察―」『歴史学研究』四二五号、一九七五

三　アフリカ

(1)　アフリカ一般

(139) 西野照太郎『鎖を断つアフリカ』岩波書店、一九五四
(140) 西野照太郎「中東・アフリカ」（植民地ナショナリズム）『国際政治』四号、一九五七
(141) 百々巳之助『アフリカの政治』有信堂、一九五九
(142) 百々巳之助『現代のアフリカ』学文社、一九六〇
(143) 世界経済調査会編『アフリカの研究』同調査会、一九六一
(144) 宍戸寛編『アフリカのナショナリズムの発展』アジア経済研究所、一九六二
(145) 西野照太郎「アフリカ・ナショナリズムの動向」『国際政治』一八号、一九六二
(146) 日本国際政治学会編『アフリカの研究』、『国際政治』一八号、一九六二
(147) 浦野起央「アフリカの政治思想」宍戸寛編『アフリカの指導者』アジア経済研究所、一九六三
(148) 奥野保男・入江敏男「アフリカ（サハラ以南）」岩波講座、現代四『植民地の独立』岩波書店、一九六三
(149) 勝岡浩「指導者と大衆組織」宍戸寛編『アフリカの指導者』アジア経済研究所、一九六三
(150) 宍戸寛編『アフリカのナショナリズムの発展』Ⅱ、アジア経済研究所、一九六三
(151) 宍戸寛編『アフリカの指導者』アジア経済研究所、一九六三

(152) 浦野起央「アフリカの政治体制の特質」『アフリカ研究』一号、一九六四
(153) 寺本光朗「アフリカにおける民族形成」アジア・アフリカ講座第一巻『A・A・LAと新植民地主義』勁草書房、一九六四
(154) 西野照太郎『岐路に立つアフリカ』国際問題新書、一九六七
(155) 谷本圭介「アフリカにおけるナショナリズムの発生」竹原良文編『ナショナリズムの政治学的研究』三一書房、一九六七
(156) 那須国男「アフリカ社会主義の特性・基盤とガーナ・マリの挫折」『月刊アフリカ』一〇巻八号、一九七〇
(157) 野間寛二郎「パン・アフリカニズムからアフリカ革命へ—アフリカにおける解放思想の発展」上・下『思想』五五三～五五四号、一九七〇
(158) 岡倉古志郎「アフリカの民族運動」岩波講座『世界歴史』二八巻、岩波書店、一九七一
(159) 赤羽裕『低開発国経済序説』岩波書店、一九七一
(160) 小田英郎『現代アフリカの政治とイデオロギー』新泉社、一九七一
(161) 西川潤『アフリカの非植民地化』三省堂、一九七一
(162) 犬飼一郎「アフリカ『社会主義』—その源流・展開・実践について」『思想』五九一号、一九七三
(163) 宍戸寛『アジア・アフリカのいわゆる〝社会主義〟の思想と政策』アジア経済研究所、一九七三
(164) 西川潤編『アフリカの独立』平凡社、一九七三
(165) 矢内原勝編『「アフリカナイゼーション」の意味と現実』アジア経済研究所、一九七三
(166) 浦野起央『発展途上国の社会主義』アジア経済研究所、一九七四
(167) 小田英郎「現代アフリカの政治的潮流と圏内の国際政治—パン・アフリカニズム、パックス・アフリカーナ、OAU」『国際問題』一七三号、一九七四
(168) 小田英郎「第二次大戦後におけるパン・アフリカニズム運動の展開について—マンチェスター会議から『パン・アフリカニズムの祖国』ガーナ独立まで」『アジア経済』一五巻二号、一九七四
(169) 山口圭介「アフリカにおけるナショナリズムと社会主義—政治的イデオロギーを中心に」I・II『アジア経済』一五巻八～九号、一九七四
(170) 川端正久「新植民地主義と現地ブルジョアジー」上・下『舞鶴工専紀要』一〇号、一九七五

(171) 内田良雄「高揚するアフリカの反帝反植民地主義闘争」『アジア・アフリカ研究』一五巻一号、一九七五

(2) 各国

(172) 柳沢英二郎「ゴールド・コースト政治史」一・二『法政論集』四巻二～三号、一九五六
(173) 勝岡宣「旧フランス領アフリカ」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』アジア経済研究所、一九六二
(174) 谷本圭介「第二次大戦後のガーナにおける民族独立運動の発展」『九大法学』一一号、一九六二
(175) 中村弘光「タンガニーカ」宍戸寛編『アフリカのナショナリズムの発展』アジア経済研究所、一九六二
(176) 中村弘光「ナイジェリア―ナイジェリアにおけるナショナリズムの展開とその特質」宍戸寛編『アフリカのナショナリズムの発展』アジア経済研究所、一九六二
(177) 西野照太郎「シェラ・レオーネとゴールド・コースト」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』同右
(178) 山下秀雄「コンゴ」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』アジア経済研究所、一九六二
(179) 山田秀雄「南ローデシア」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』アジア経済研究所、一九六二
(180) 勝岡宣「マダガスカル」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』Ⅱ、アジア経済研究所、一九六三
(181) 古賀十也「ポルトガル領アフリカ」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』Ⅱ、同右
(182) 佐藤昌幸「仏領赤道アフリカ」宍戸編『アフリカのナショナリズムの発展』Ⅱ、同右
(183) 谷本圭介「統一ゴールド・コースト会議の結成と暴動の勃発―第二次大戦後のガーナにおける民族独立運動の開始と蹉跌」『政治研究』一〇～一一号、一九六三
(184) 中村弘光「熱帯アフリカのナショナリズムとエリート―主としてナイジェリアの事例を中心として」『アフリカ研究』二号、一九六五
(185) 谷本圭介「ガーナにおける民族主義指導権の成立」『政治研究』一四号、一九六六
(186) 岩城剛「タンザニア経済と国有化政策」『月刊アフリカ』七巻八号、一九六七
(187) 谷本圭介「エンクルマ政権崩壊の原因」『国際政治』三九号、一九六八
(188) 吉野圭子「ウガンダにおける政治変動とナショナリズム―伝統的首長の役割」『アフリカ研究』九号、一九六九
(189) 林晃史「タンザニアの『社会主義化』―ウジャマー演説からマルーシャ宣言へ」『アジア経済』一二巻三号、一九七一

(190) 細見真也「アフリカにおける国家成立の条件―ビアフラ紛争にみる脱地域主義の試み」『アジア経済』一二巻三号、一九七一
(191) 岡倉登志「ポルトガル領ギニアでの民族解放闘争」『アジア・アフリカ研究』一二巻二号、一九七二
(192) 内田良雄「ギニア・ビサウ共和国の独立とその意義」『アジア・アフリカ研究』一四巻九号、一九七四
(193) 川端正久「植民と抵抗―ギニア・ビサウ民族解放運動前史（一六七九～一九四四）」『アフリカ研究』一五号、一九七六

〈追加〉

(194) 板垣与一「マライ・ナショナリズムの展開過程」『一橋論叢』二七巻二号、一九五二
(195) 青野博昭『現代アジア革命の考察』三一書房、一九六九
(196) 松本三郎『中国外交と東南アジア』慶応義塾大学法学研究会、一九七一
(197) 黒柳米司「インドネシアの『政治的軍隊』―その政治化要因と行動要式」『外務省調査月報』一六巻三号、一九七五
(198) 小田英郎「現代アフリカの政治と軍部」『法学研究』四〇巻八号、一九六七
(199) 浦野起央『アフリカ国際関係論』有信堂、一九七五
(200) 蠟山芳郎『マハトマ・ガンジー』岩波新書、一九五〇